

市長室から こんにちは

vol. 72



益田市市長
山本 浩章

前回の東京五輪の遺産としては、ハード面の充実のほか、ソフト面での進化も見逃せません。

抜本的な革新が求められたのは調理の分野でした。食文化の一端でない1万人以上の選手・関係者に対し日に3度食事を供給すること自体、これまで経験のない大プロジェクトだったのです。そこで、食品冷凍技術の研究・改良を重ねる一方、全国から選抜された一流の料理人によるチームを編成した上で調理工程を細かく分業することとし、さらに互いに秘伝としていたレシピと調理法を共有し徹底的にマニュアル化しました。こうして、高い品質を維持しながら大量かつ多品種の料理を短時間で仕上げる手法が確立されました。

季節感や繊細美を重んじる和の伝統に最先端の国際性と機能性が加わることで、日本の食はめざましい飛

躍を遂げました。事実、今や日本はミシランガイドによる三ツ星レストランの数で他の追随を許さないグローバル大国なのです。

また、単純明快な絵文字による施設の案内誘導や競技種目の表示を可能とする「ピクトグラム」の本格運用も東京五輪からでした。外国語に対応できる人材が不足していた日本で、国際大会を円滑に運営するために導入されたものですが、その簡便さから今では「世界共通言語」として定着しています。私が重ね重ね感嘆するのは、トイレの表示です。用途をあらさまに示すのではなく、青と赤のシルエットを並べて男女別々の空間と類推させる着想は実にエレガントです。

1964年の東京五輪は、その19年前の敗戦からの完全復活を告げるものでした。次のTOKYO2020においては、もはや全面的な都市改造は望むべくもありませんが、自然との共生、多様性の尊重、AIやIoTの活用など、理想の未来を体現する大会運営は可能です。その意味で、発災から9年となる東日本大震災からの復興を象徴すると同時に、バブル崩壊後30年の閉塞感を払拭し、再び世界をリードする国として注目される機会となることを期待します。

益田市の歴史文化の特色 (全7回) 第4回 1000年の歴史を誇る都茂鉦山と古代官衙群・式内社

【問い合わせ先】
市文化財課 ☎ 31-0623

日本の古代国家が、中国にならって律令という法律による統治制度を導入すると、全国に70弱の国が設置され、現在の島根県西部は石見国となりました。

各国は複数の郡で構成され、現在の益田市に相当する地域は美濃郡とされましたが、当初は現在の鹿足郡(津和野町と吉賀町)も含む、かなり巨大な郡でした。それは、現在の益田市域にかなり巨大な豪族がいたことを示しています。鹿足郡は承和10(843)年に美濃郡から分割して設置されました。このとき分割された郡の境界が大境(安富町・横田町)であるといえます(郡域は後に変更します)。

仁寿4(854)年、美濃郡で醴泉(甘い味のする水)が出て、とてもめでたいこととして斉衡元年に改元されました。この醴泉が養老滝(美都町宇津川)であるといわれます。

元慶5(881)年、美濃郡都茂郷丸山で銅が産出されました。これが昭和62(1987)年の閉山まで1千年以上の歴史を誇る都茂鉦山の始まりです。東仙道には、古代の官衙(役所)跡と推測される酒屋原遺跡や役人の居住集落跡と考えられる下都茂原遺跡がありますが、これらも都茂鉦山との関係が推測さ

れています。

このほか、安富町の中小路遺跡などが古代官衙跡と推測されています。

延長5(927)年に編纂された「延喜式」には、諸国の神社の名前が記されており、そこに見える神社を「式内社」といいます。美濃郡五座として、菅野天財若子命神社、佐毘売山神社(乙子町)、染羽天石勝命神社(染羽町、染羽天石勝神社)、櫛代賀姫命神社(久

城町、櫛代賀姫神社)、小野天大神之多初阿豆委居命神社(読みは一部推定)が挙げられています。菅野には戸田町の小野神社とされていますが、近年は横田町の豊田神社とする説もあります。また、佐毘売山神社は都茂鉦山の技術者が信仰したと考えられています。

これらの文化財や神社から古代の益田の様子を知ることができます。



式内社の一つ、佐毘売山神社
(現在の読みは「さひめやまじんじや」)